

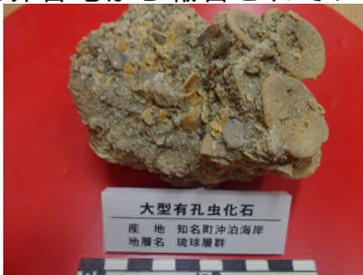
鹿児島の地質34 沖永良部島の県指定天然記念物 地質担当 鈴木 敏之

沖泊海岸の大型有孔虫化石密集層

指定日 平成24年4月20日

場所 大島郡知名町下城須原(沖泊)

沖泊海岸の露頭は、約90万年前にサンゴ礁が形成され始めた頃の琉球列島の位置関係や地層、岩石の変化や沖永良部島の隆起・沈降などの歴史を知る上で極めて重要です。大型有孔虫は、亜熱帯から熱帯地域の沿岸浅海域に生息している単細胞生物の1つのグループです。有孔虫はこれまでに、約25万種が知られており、南の島の砂浜でよく見られる「星砂」なども有孔虫のなかまです。ほぼ同一の大型有孔虫の密集した層として、約6,000万～3,000万年前に生息したヌムリテス(貨幣石)の地層が世界各地から報告されていますが、それ以降の第四紀(258万年前～現在)においては、ほぼ同一の大型有孔虫化石が密集する層は少ないといわれています。沖泊海岸の大型有孔虫化石



そのようなことから、オパキュリーナ・コンプラナータが大部分を占める沖泊海岸の大型有孔虫化石密集層は、大変貴重なものと言えます。

大津勘のビーチロック

指定日 平成24年4月20日

場所 大島郡知名町大津勘185-1

大津勘のビーチロックは砂浜にできた非常に新しい石灰質砂岩で、厚さ約10cm～60cmの層が何層かに重なってできています。その規模は、長さ約200m、最大幅約20～40mで地表に現れています。地下水に溶けている石灰分が太陽熱を吸収することによっておこるセメント作用により、砂やサンゴの破片などを固めてできたものです。琉球列島の中でも際だって規模が大きく、琉球層群の石灰岩にも接していることから、大地の変動や岩石の成因を学ぶ



場所として貴重です。大津勘のビーチロック

鹿児島の植物49 パラサイト植物～キイレッツトリモチ

植物担当 寺田 仁志

緑色植物は、根から吸収した水と葉から取り入れた二酸化炭素を原料にして、太陽の光エネルギーを使って、せっせと栄養分や自分の体の成分を作る光合成をします。

ところが、この緑色植物にとりついて植物が作った栄養分を吸収するずるい、いやいや賢い植物がいます。寄生＝パラサイト植物と呼ばれています。

寄生も様々です。ツチトリモチやヤッコソウのように全く緑色の色素を持たず栄養を他の植物に頼るものもあれば、ヤドリギのように緑色の葉を持っていて光合成もしますが、根を他植物の幹に侵入させそこから養分を横取りする半寄生植物と呼ばれるものもいます。

ツチトリモチの仲間には県内にはツチトリモチだけでなくミヤマツチトリモチ、キイレッツトリモチ、オオスミツチトリモチ、ヤクシマツチトリモチなど多数あり、特定の地域で特定の植物の根に寄生します。

このうち、キイレッツトリモチは明治43(1910)年、鹿児島市喜入町の喜入小学校の後背の森から当時同校の教員であった山口静吾

氏が発見し、牧野富太郎博士によって命名されました。一年生植物で種子が芽生えたものがトベラやネズミモチときにはシャリンバイなど海岸性木本植物の細根にとりつき、養分を吸収する根は肥大化して塊状になります。11月から1月にかけて突然淡い黄色の花穂が地表に現れます。花穂には泡粒状の雌花が多数集合しその中を点々と雄花がつきます。雄花には花びらが3枚あります。茎には痕跡となった淡い黄色の葉が5枚ほどつきます。

このキイレッツトリモチは珍しい形態や生態を持ち学術的に価値が高いということで、大正10年に鹿児島市磯の生育地が全国で1カ所国の天然記念物に指定されています。



根は肥大化する